

リスク管理

半年にわたって企業リスクについて様々な角度から見てきた。多様な価値観の共存する社会、国際化社会、高度技術化社会、自由競争化等、社会がその様相を変える毎にリスクは新しい姿で登場してゐることが実例を通して実感出来る。リスクはその時点では見えなくても、その後の時間の経緯と社会環境の変化と共に姿を現すものであり、日常の企業活動のすぐそばでその出番を手ぐすね引いて待っているものでもある。

◇

さて、これまでいろいろな企業リスクをテーマにその特性と対応への示唆を示してきた。改めて今回の講座で取り挙げてきた企業リスクをその特徴から分類してみると別表のようになる。

リスクマネジメント

ABC

改めて企業リスクとは

リスクの分類

リスク分類	リスクの具体例
企業活動に伴うリスク	与信リスク、食に係るリスク、大学・研究リスク、資金繰りリスク
企業存在、企業維持に起因するリスク	人材流出リスク、ブランドリスク、人材確保リスク、人事リスク、セクハラ・パワハラ、検診義務化リスク、メンタルリスク、集団飼育リスク
社会環境の変化に伴うリスク	会社法改正に伴う内部統制リスク、財務報告リスク、金利・為替変動リスク、公共工事談合リスク、CSR、格付けリスク

これら多様な特性を持つリスクであるが、それらに対する企業が採るべき対応の基本は二つである。

る。

一つは、自らが関与するリスクについてはステークホルダーの誰よりも、早く認識すべきであるということである。そのためには、自らのリスクにかかわる情報が組織内外から集まる仕組みとリスク情報が組織の中で握り潰されない仕組みを作ることである。

かを、客観的に考えることが出来る組織でなければならぬということである。

二つ目はそのリスク情報を積極的に社会に公表し、リスク顕在化の阻止、社会が許容出来る範囲内への被害最小化への取り組みを表明することである。その取り組みがこれからの企業評価の重要な要素の一つになる。同時に認識したリスクについては厳格にその重大性を検証し、その上でそのリスクが顕在化した時には、誰に対して不都合を生じさせることになるのか(もちろん、自らの存立にかかわることも含めて)、その深刻さの度合いはどうであるか、それに対する対応策の有無、有効性はどうかである。

次回からも引き続いて企業リスクの実例を示しながらリスク社会における企業の在り方を考えていきたい。

(日本総合研究所)

早期の認識・公表が基本